Lacquerwares of HwangNam DaeChong tomb: Lacquer technique and construction

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-09-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: OKADA, Fumio, Lee, Eun-seok, LIM, Ji-young
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059499

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

慶州皇南大塚より出土した漆製品の材質・技法調査

岡田文男（京都芸術大学）
李恩碩（イウンソク）（国立伽耶文化財研究所）
林志暎（イムジョン）（国立釜山大学校博物館）
（大谷育恵　訳）

Ⅰ. はじめに

慶州市皇南洞味鄒（みすう）王陵地区古墳公園に位置する皇南大塚は、1973 年から 1975 年まで 3 年間にわたって文化財管理局が発掘調査した新羅最大の古墳である。

南墳と北墳からなる本古墳からは金製品、金銅製品、鉄製品、ガラス製品など多彩な副葬品が出土しており、多くの遺物が 5 世紀から 6 世紀にかけて東アジアで製作された遺物の基準資料として韓国内外に広く紹介されてきた [文化財管理局 1985; 同 1994]。しかしながら、漆器類は相当量が出土しているにもかかわらず腐食がひどく、展示に供されることが少なく、他の遺物ほどその重要性が認識されないまま今日に至っているように思われる。

2001 年 5 月に国立慶州文化財研究所に収蔵されている皇南大塚南・北墳から出土した漆器を詳細に観察する機会が得られ、そのうち一部漆器遺物の塗装技法に関する調査が許可された。

本稿では古墳から出土した漆製品の材質と技法を調査し、その結果をもとに考古学的位置づけを試みる。今回の報告が皇南大塚南・北墳から出土した漆製品の重要性周知に微力ながら貢献できる機会とれば幸いである。

写真 1　耳杯　把手（南墳 Box6）

Ⅱ. 皇南大塚出土漆器の分類

皇南大塚の南・北墳より出土した漆工品の多くは、慶州国立文化財研究所に取り上げ後の状態のまま保管されていた。古墳が発掘された 1970 年代には漆製品の保存法が世界的に未確立であったこともあり、同古墳から出土した漆器類は出土後に劣化が進行し、現在では本来の形状が把握しにくい状態になっているものが多い。漆器は出土時に集合状態であったためか、整理箱に一括して取り上げられたとみられるものがある。南墳の Box6、Box8、Box23 のものはその状態を示す。他方、北墳では漆器の出土点数が全体として少なく、集合単位で取り上げられているのは北墳の Box607、Box612 などで、それ以外は単体に近い状態で収納されている。それら南・北墳より出土した漆器のうち、可能なものについては器種を分別し、それらの破断面から胎骨を推定した。分別できたのは全体のごく一部であるが、結果を示すと以下がある。

1. 南墳より出土した漆器の器種

南墳より出土した漆器のなかで器種を分別したのが表 1 である。

表 1　皇南大塚南墳より出土した漆器の器種

器種	判別部位と胎骨	色調	保管箱	写真
耳杯	把手遺存・布胎	内赤・外黒	Box6	1
盌	底部遺存・布胎	内赤・外黒	Box8	2
長方形合子(奩)	底部遺存・布胎	内赤・外黒	Box23	3
高杯杯部？	塗膜のみ・布胎	外黒・文様	Box8,6	4
黒色の盤ないし盌？	木胎・挽物か？	黒	Box6	5
箱？	塗膜のみ	内赤・外黒	Box8	6
容器の金銅釦金具	覆輪のみ		Box8	
曲物	木胎	黒	Box6	7
櫃ないし木棺	木胎	赤	Box6	8

写真 2　盌（南墳 Box8）

写真 3　布胎長方形合子（奩）（南墳 Box23）

写真 5　木胎容器（盌類）（南墳 Box6）

写真 7　曲物容器（南墳 Box6）

耳杯（写真 1）　南墳の Box6 に楕円形耳杯の把手部分が遺存し、点数は少なくとも数固体分になる。杯については未確認である。

盌（わん）（写真 2）　南古墳の Box8 に内面が赤色、外面が黒色で、底径が約 6cm、高さ不明の盌とみられる固体が数個、重なった状態で遺存する。胎骨は布で下地は黒灰色を呈し、粒子がやや粗く、脆い。

長方形合子（奩）（れん）（写真 3）　南古墳の Box23 中に、底板の長辺約 7cm、短辺約 4cm 長方形の小形合子が潰れた状態で遺存する。器物の内面は赤色、外面は黒褐色で、胎骨は布で、下地は黒灰色を呈し、粒子がやや粗く、脆い。点数は複数になる。

写真 4　容器外面（南墳 Box6）

写真 6　箱？（南墳 Box8）

写真 8　木棺もしくは櫃片（南墳 Box6）

高杯の杯部分?（写真 4）　南墳の Box6・Box8 に、外面が黒漆地で、そこに赤と黄色で火焔文が描かれた高杯の杯部とみられる破片が遺存する。胎骨は布である。

盤?（写真 5）　南墳 Box6 に、内外面黒漆を塗布した盤とみられる厚さ約 5mm の木胎漆器片が遺存する。一部に金箔が残るものもあり、別固体とみられる。木胎の樹種は環孔材である。

箱？ (写真 6)　南墳の Box8 には内面が赤、外面が黒で、塗膜の胎骨側に籠目痕が遺存する破片が多数遺存する。その中に長方形に近い破片が含まれており、胎骨が籃胎の箱であった可能性がある。

曲物 (写真 7)　南墳の Box8 には表面にわずかに黒漆の付着し、幅が数 cm 以下、厚さが 2mm に満たない帯状の木胎で、曲物の一部とみられるものが遺存する。綴じ部分は不明である。

櫃ないし木棺の一部 (写真 8)　南墳の Box6 には櫃ないし木棺の一部とみられる厚さ 10cm 近い部材が遺存する。木材の表面は赤彩されている。表面の赤彩は日本における古墳時代のそれ [岡田 2005] と酷似する。

2. 北墳より出土した漆器の器種

北墳より出土した漆器のなかで、器種を判別した結果を表 2 に示した。

耳杯 (写真 9)　北墳の Box607 には木胎の胎骨が消失した塗膜がまとまって遺存する。そのなかに、土圧で潰れているが、外面が黒色で長円形を示す塗膜があり、耳杯とみられる。

盂 (写真 10)　北墳の Box603 に、内面が赤、外面が黒で、円形の底と側面からなる塗膜が遺存する。塗膜の胎骨側に籠目の痕跡があり、胎骨が籃胎であったことが知れる。器種は盂であろうか。

箱？ (写真 11)　北墳の Box612 には多数の塗膜片が遺存し、そのなかに外面が黒色の長方形に近い形の塗膜がある。胎骨は消失しているが、塗膜の下地は黒色で、箱の側面である可能性がある。

容器類 (写真 12)　北墳の Box605、Box607、Box611、Box613、Box615、Box616 には木胎容

写真 9　耳杯 (北墳 607)

表 2　皇南大塚北墳より出土した漆器の器種

器種	判別部位と胎骨	色調	保管箱	写真
耳杯	塗膜・木胎？	外黒	Box607	9
盌	塗膜・夾苧胎	内赤・外黒	Box603	10
箱？	塗膜のみ・木胎？	黒	Box612	11
高杯？	塗膜のみ・木胎	外黒・文様	Box602,604,605,607,610,613,614,615,616,617,618,621,624	12

写真 10　盂？ (北墳 603)

写真 11　箱？ (北墳 612)

写真 12　容器類 (北墳 616)

器の塗膜が遺存する。胎骨はすべて消失している。容器の外面塗膜には黒漆地に動物文や火焔文を描いたものがある。動物文 (Box602) は黒漆地に赤の単色で、鳥文と火焔文は黒漆地に赤色と黄色で彩色している。

3. 南・北墳より出土した漆器の文様

南・北墳より出土した漆器の多くは内面赤色・外面黒色、もしくは内外面ともに黒色で、無文の漆器が多く、一部に文字や文様のある漆器も認められた。それらを示すと以下のとおりである。

(1) 文字 (写真 13)

やや栗色を呈する漆地に赤漆で「东」と朱書された塗膜片が北墳 Box609 に 1 点遺存する。

(2) 火焔文 (写真 14)

容器外面の栗色を呈する漆地に赤と黄色で火焔文を描いた塗膜片が南墳 Box8 と北墳 Box616 にそれぞれ少なくとも 1 個体分遺存する。

(3) 動物文 (写真 15)

容器外面の黒漆地に動物が複数頭右から左方向に歩む場面を朱描きした塗膜が北墳 Box602 に遺存する。

(4) 鳥文 (写真 16)

容器外面の黒漆地に、赤と黄色で鳥が右から左方向に向かう姿を描いた塗膜が北墳 Box604、Box 605、Box 613、Box 615、Box 616、Box 624 に遺存する。文様のなかで鳥文はもっとも多い。

(5) 幾何学文 (写真 17)

赤漆地に黒漆で幾何学文を描いた塗膜片が北墳の Box614 に 1 点遺存する。

4. 胎の種類

南･北墳より出土した漆器は発掘後の乾燥により、多くが破片になっている。塗膜の破断面を観察することにより、漆器の胎骨を推定できたものに以下がある (分析結果については第 3 章で扱う)。

(1) 夾苧胎

夾苧胎漆器は胎骨の両面に苧麻布を貼り、その表面の布目を塑形材で潰し、さらに下地をして漆塗装した、胎骨を苧麻布で挟んだ漆器を指す。類例が南墳の Box8 に少なくとも 1 個体分 (写真 6)、北墳の Box603 に原形を復原可能な 1 個体 (写真 10) が遺存する。

写真 13　容器外面に「东」の文字 (北墳 609)

写真 14　容器外面の黒漆地に火焔文 (北墳 616)

写真 15　黒漆地に動物文 (北墳 602)

写真 16　容器外面の黒漆地に鳥文 (北墳 616)

写真 17　赤漆地に黒漆による幾何学文 (北墳 614)

⑵ 布胎

南墳より出土した漆器の中で、Box6、Box8、Box23 に見られる塗膜片は細片化しており、その断面に胎の布が見える。布は平織りで、織が粗く、材質は植物繊維である。北墳より出土した漆器で布胎と判断できるものに Box609 中の「东」と漆書のある塗膜 (写真 13)、Box616 中の火炎文容器の破片 (写真 14) が挙げられる。

⑶ 木胎

南墳の Box6 には木棺もしくは櫃の一部とみられる厚さ 10cm 近い材の表面に赤色顔料を塗布したもの (写真 8) と、黒漆を塗布した器壁が 1cm 以下の容器類 (写真 5, 9, 11) がある。そのほか、曲物 (写真 7) がある。

Ⅲ . 皇南大塚出土漆器の塗膜分析

3. 1. 調査の方法

塗膜断面の顕微鏡観察にあたり、試料をエポキシ樹脂 (主剤：アデカレジン EP4200、硬化剤：アデカハードナー 4332、配合比 5：2) に包埋し、塗膜断面を研磨してまず反射光による観察を行い、次いで鉱物用スライドガラス (厚さ 1.2mm) に包埋用エポキシ樹脂で接着し、試料の厚さを約 20㎛に研磨し、生物顕微鏡ならびに偏光顕微鏡を用いて塗装の塗り重ねや混和物について調査した。

3. 2. 結果

南・北墳より出土した主な漆器の塗膜断面構造の観察結果を表 3 と表 4 に示し、個々に解説を加える。

⑴ 夾苧胎容器の塗膜構造 (写真 18,19)

写真 18-1 は夾苧胎漆器の見込み部分の破片で、赤色に塗布されている。写真 18-2 はその胎骨に接した面で、やや灰色を呈する色調で、籠状に編んだ籠目を埋めた塑形層のみが遺存している。写真 19-1 は塗膜断面を反射光下において観察した結果であり、断面の色調から 3 層に分層可能で、下層は褐色を呈する布層を、中層は黒色を呈する下地層を、上層は赤色漆層である。写真 19-2 はその断面を透過光下において観察した結果であり、写真の下部右寄りに褐色を呈した布目の下端にごく一部であるが、黒色に見える部分が籠目を埋めた塑形層である。左右に広がる布目は植物繊維布である。その上に 3 層よりなる下地層があり、焼成した骨を粉末にした骨粉が認められる [金庚洙(キム キョンス)ほか 2003]。その上に黄褐色を呈する漆層、さらに赤色顔料を混和した赤漆層がある。

塗膜分析の結果、本漆器は皇南大塚より出土した漆器のなかでもっとも丁寧に作られており、夾苧胎の本来の意味である、「胎を苧布で挟んだ漆器」の典型例である。

⑵ 布胎漆器の塗膜構造 (写真 20~23)

写真 20-1 は南墳の Box8 にみられる布のみを胎とする漆器の外面の黒漆膜である。写真 20-2 はその内側で布胎部分を示す。皇南大塚古墳より出土した布のみを胎とした漆器はどれも細片化している点

表 3　南墳より出土した漆器の塗膜分析結果

器種	胎	下地混和物の種類	外面塗装	内面塗装	収納箱	写真
夾苧胎容器	苧麻布	漆＋骨粉 / 漆＋無色鉱物を 4 回	1 層	1 層 (辰砂)	Box8	18・19
耳杯	—	漆＋骨粉 / 漆＋無色鉱物	2 層	1 層 (辰砂)	Box6	
盌	布の痕跡	漆＋骨粉 / 漆＋無色鉱物	2 層	1 層 (辰砂)	Box8	20~23
長方形合子		漆＋骨粉＋無色鉱物	2 層	1 層 (辰砂)	Box23	
火焔文	布の痕跡	漆＋骨粉 / 漆＋無色鉱物	2 層	—	Box6	
木胎容器	木胎	漆＋骨粉＋無色鉱物 / 無色鉱物	—	1 層 (辰砂)	Box8	24・25
木胎容器	木胎？	木炭粉＋小土塊 / 無色鉱物	—	1 層 (辰砂)	Box8	26・27
木胎盌 or 盤	広葉樹材	—	透明漆		Box6	
木胎曲物	広葉樹材	—	透明	1 層	Box6	30・31

表 4　北墳より出土した漆器の塗膜分析結果

器種	胎	下地混和物の種類	外面塗装	内面塗装	収納箱	写真
夾苧胎容器		漆＋骨粉 / 漆＋無色鉱物	2 層	—	Box603	
夾苧胎容器	布	漆＋骨粉 / 漆＋無色鉱物	2 層	—	Box616	
容器・鳥文	広葉樹材	火山ガラス付着	3 層	—	Box614	28・29

写真 18-1　南墳 Box8 中の夾苧胎漆器内面の赤漆

写真 18-2　18-1 の裏面

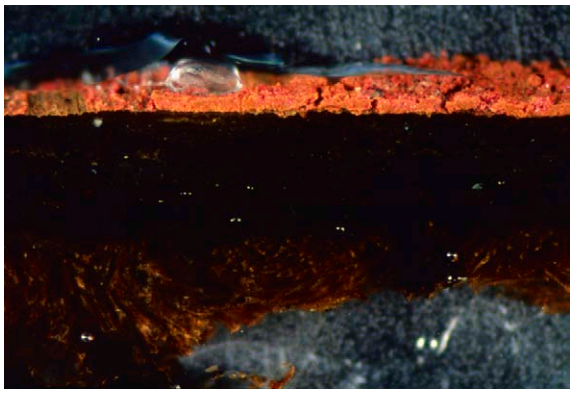


写真 19-1　同上資料の断面（反射光）

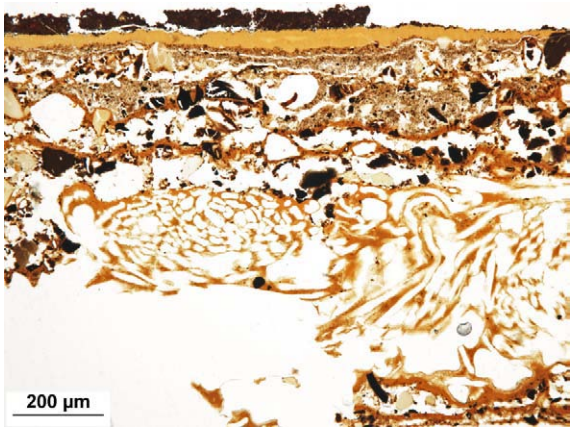


写真 19-2　同上資料の断面（透過光）

写真 20-1　南墳 Box8 中の布胎漆器外面の黒漆

写真 20-2　20-1 の裏面

写真 21-1　同上塗膜断面（反射光）

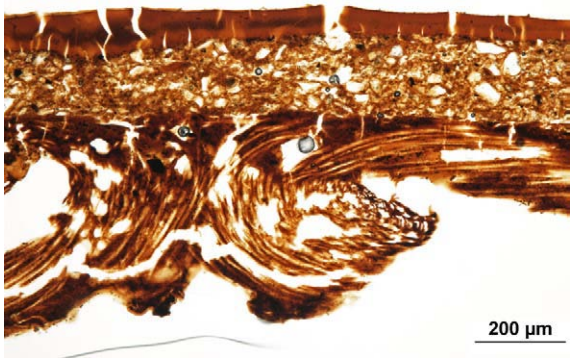


写真 21-2　同上塗膜断面（透過光）

写真 22-1　南墳 Box8 中の布胎漆器内面の赤漆

写真 22-2　22-1 の裏面

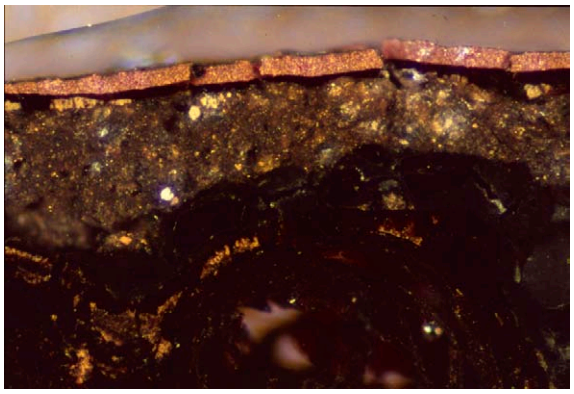


写真 23-1　同上の塗膜断面（反射光）

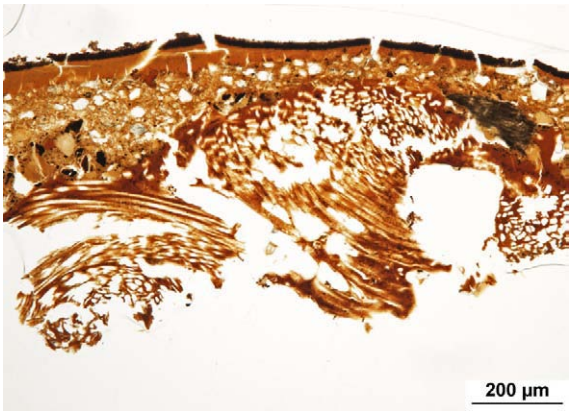


写真 23-2　同上の塗膜断面（透過光）

に特徴がある。布の織りはごく粗い。布が黒色を呈しているのは漆が浸透した結果である。写真 21-1 は塗膜断面を反射光で、写真 21-2 は同断面を薄片にして透過光下において観察した結果である。写真 21-1 の塗膜断面は下層から概略 3 層 (下層・中層・上層) に分層される。すなわち、下層は黒色を呈し、植物繊維布の断面で、膜厚の 2/3 を占める。中層は明灰褐色を呈し、その上面には起伏がある。中層と上層の境界面は黒ずんでいる。上層は明褐色を呈する漆層であり、表面は黒変している。写真 21-2 は塗膜断面を薄片下で観察した結果である。断面の下半分に布断面がみえる。布が濃い褐色を呈しているのは漆分が多いことを示す。布層の上面の起伏を均すように、ごく薄く、骨粉を混和した層があるが、骨粉は黒褐色を呈しているため、周囲の漆と判別しにくい。その上に骨粉を含まない鉱物のみの層があり、さらにその上に漆層が 2 層程度ある。漆層には層向と直交する細かな亀裂が多数認められ、劣化が進行している。

写真 22 は同一漆器の内面の赤色塗膜を示す。写真 23 左右に示すごとく、塗膜の基本構造は外面と同様であるが、表層に辰砂を混和した層がある。

(3) 木胎漆器の塗膜構造 (写真 24~31)

①骨粉を混和した下地

写真 24-1 は南墳の Box 8 に遺存する木胎漆器の外面である。写真 24-2 はその内側で、表面に乾燥した褐色の木質が付着する。写真 25-1 はその断面を反射光下で観察した結果であり、塗膜断面の最下部にみえる褐色部分が木質である。その上にまず黒灰色層があり、ついで明褐色層が重なるが、それらが下地層である。層中にみられる黒色の粒子は骨粉である。その上に、明黄色を呈する漆層がある。写真 25-2 は同一塗膜を薄片下で観察した結果であり、下地中に乳黄色から黒色を呈する骨粉が多量に混和されている様子がみえる。

②木炭粉を混和した下地

写真 26-1 は南墳の Box8 にみられる下地が黒色で、その上に白色層を重ねた下地の上に赤色漆を塗布した塗膜片である。写真 26-2 は胎骨側の部分であり、白色で、布や木胎の痕跡は不明であるが、下地混和物が木炭粉であった様子から、木胎漆器と判断した。写真 27-1 にみるごとく、反射光下におい

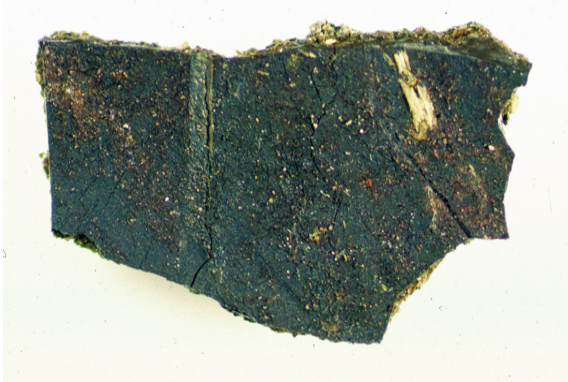


写真 24-1　南墳 Box8 中の木胎漆器（骨粉下地）の外面黒漆

写真 24-2　24-1 の裏面

写真 25-1　同左上の塗膜断面（反射光）

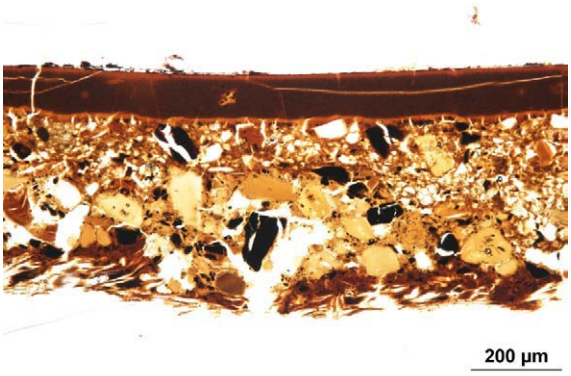


写真 25-2　同左上の塗膜断面（透過光）

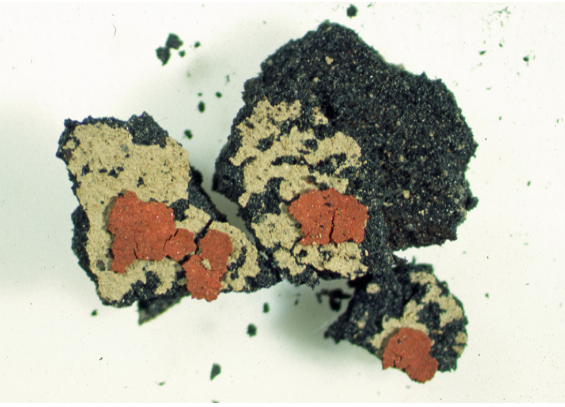


写真 26-1　南墳 Box8 中の木胎漆器（木炭下地）内面赤漆

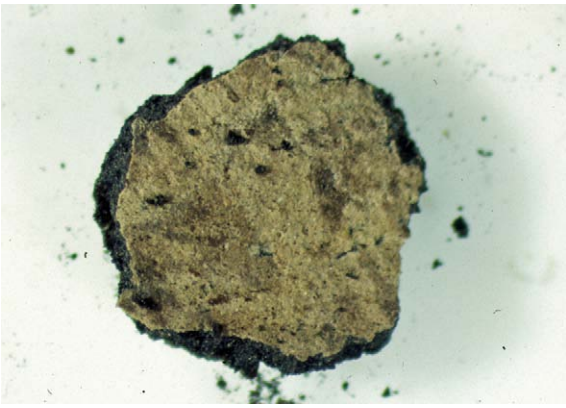


写真 26-2　26-1 の裏面

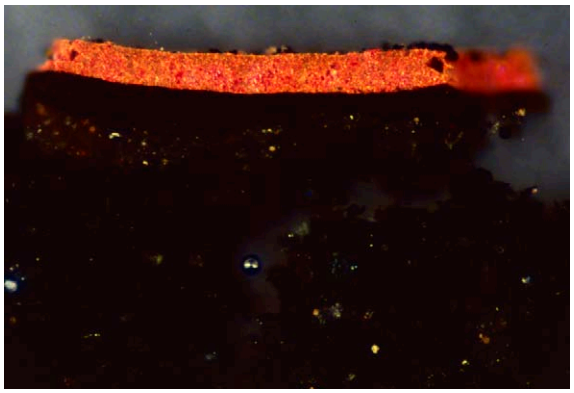


写真 27　同上の塗膜断面（反射光）

写真 27　同上の塗膜断面（透過光）

写真 28-1　北墳 Box614 中の動物文木胎漆器外面の黒漆

写真 28-2　28-1 の裏面

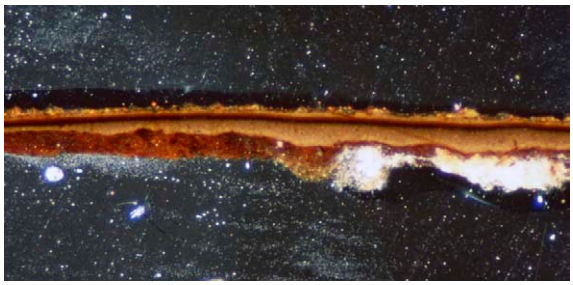


写真 29-1　同上の塗膜断面（反射光）

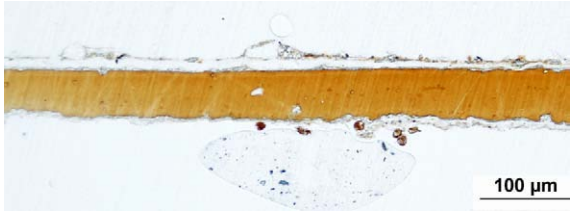


写真 29-2　同上の塗膜断面（透過光）

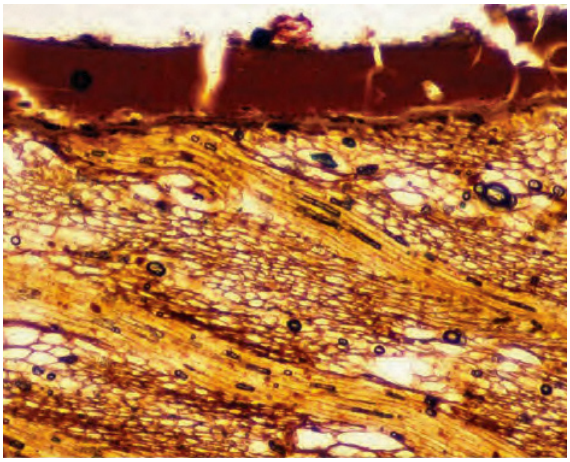


写真 30　28-1 の断面
（ケヤキもしくはクワ属の横断面）

て塗膜断面は黒色を呈し、透過光下ではその部分に木炭粉が厚く認められ、その間に土器もしくは瓦の砕屑物とみられる、丸みのある土塊が含まれる。その木炭粉層の上にごく薄く鉱物のみの層があり、ここまでが下地層である。写真 27-2 では表面の赤漆層が剥離する。

③火山灰を混和した下地

写真 28-1 は北墳の Box614 に収納された外面に鳥文が描かれた木胎漆器の塗膜である。写真 28-2 は鳥文の顔料がわずかに残る塗膜の外面部分であり、写真 28 右は木胎に接した側である。写真 28 右の塗膜面に白い斑点状に配列するのは木胎が広葉樹材 (環孔材・ケヤキ ?) であり (写真 30)、その道管孔を埋めて施された下地の一部が道管孔に入り込んだことを示す。写真 29-1 は塗膜断面を反射光で観察した結果であり、塗膜断面の右下部に白色を呈する塊が写っているのは下地の一部である。その上に水平方向にのびる漆層があり、漆を 3 層ほど塗り重ねている。写真 29-2 は塗膜断面を薄片下で観察した結果であり、偏光下において、下地部分に偏光を示さないガラス質の物質が確認されたことから、火山灰起源の火山ガラスと考えられる。

④木胎に漆を直接塗布（下地省略）

写真 31 は南墳 Box6 中の曲物片で、表面に黒漆を塗布する。写真 32-1 は塗膜断面を反射光下において観察した結果であり、塗膜断面の大部分を明褐色の木胎が占め、その上面に灰黒色層が水平方向に左右にのびており、これが漆層である。写真 31-2 は塗膜断面の薄片を透過光下で観察した結果であり、写真の下から 3/4 ほどは木胎部分であり、柾目面が示され、広葉樹材の放射組織がみえる。放射組織は平伏細胞のみからなり、道管が等間隔で配列している様子から、樹種はヤナギ科ヤナギ属の可能性がある (写真 33)。木胎の表面に褐色の塗装が水平方向に左右にのびているが、塗装部分に下地はみられず、漆層が 2 層程度の簡略な塗装である。

Ⅳ．考察

4.1. 皇南大塚南・北墳より出土した漆器群の考古学的位置付け

皇南大塚の南・北墳より出土した漆器はいずれも細片になっているため、これまで漆器の性格が十分把握されず、紹介される例も限られていたようである [国立民俗博物館編 1989]。このたびの調査は両墳より出土した漆器を瞥見したのみで、一層の精査が必要であるが、表面観察ならびに塗膜断面観察の結果、新たに判明した点をもとに、両墳より出土した漆器群の性格について、考古学的な位置づけを試みる。

(1) 器種構成にみる特徴

(a) 南・北墳より出土した夾苧胎漆容器

特筆すべきこととして、両墳に夾苧胎容器が含まれていた点があげられる。夾苧胎容器は中国において戦国時代～漢代より発達し、以後、中国版図の墳墓より多量に発見されている [中国漆器全集編集委員会編 1998]。通常､墓に副葬された夾苧胎漆器は、墓の規模と密接に関係し、墓の規模が大きく、被葬者の社会的地位が高いほど検出率が高い。夾苧胎漆器には金属の覆輪を施し、表面に複数の色漆で文様を描くなど、加飾も多彩である。類品が朝鮮半島における楽浪郡の官人墓より多量に出土している [原田 1930; 岡田 1995]。

南・北墳より出土した籠目の残る漆器は、籠状編み物を胎とし、その両面に布を貼った、夾苧胎漆器で、『楽浪彩篋塚』に類品がある [朝鮮古蹟研究会編 1934]。それらは中国において秦～漢代以降に発達した高級漆器の系譜に位置づけられる。

(b) 布胎漆耳杯

両墳より出土した耳杯は、中国において戦国時代より飲器としてもちいられ、漢代以後、中国版図の墳墓より多量に発見されている。通常、墓に副葬される漆耳杯には、夾苧胎と木胎がある。さらに、加飾については内赤・外黒で複数の色漆で文様を描いたもの、金属の覆輪を施したもの、無文で内赤・外黒、内外面とも黒まで幅広い。類例は朝鮮半島における楽浪郡の官人墓より多量に出土している。南墳より出土した漆耳杯は内赤・外黒の布胎であり、それらは夾苧胎漆器と同様、高級漆器の系譜に位置づけられる。

写真 31　南墳 Box6 中の木胎漆器

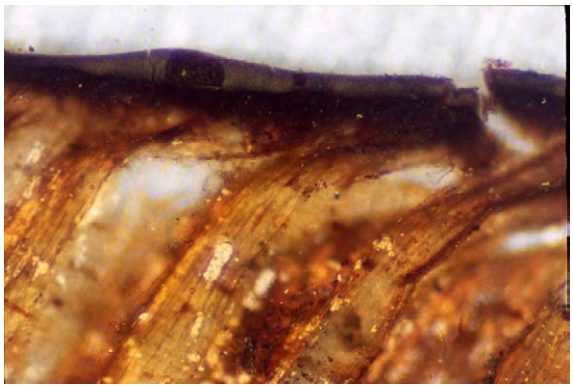


写真 32-1　写真 31 の塗膜断面

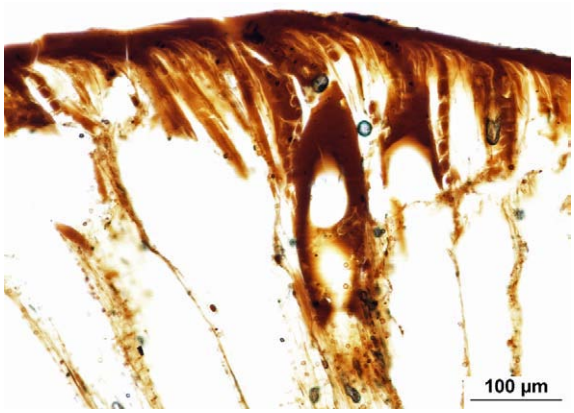


写真 32-2　ヤナギ属の放射断面（単列放射組織）

(c) 南墳より出土した布胎漆長方形合子（奩）

南墳より出土した漆器の多くは細片化しているが、Box23 に収納された漆器の中に小型の長方形合子 (奩) が含まれていることは特筆に価する。これらの小合子類は中国漢代において化粧箱の中に組物の一つとして納められるのが一般的であった [中国漆器全集編集委員会編 1998]。類品は楽浪郡の官人墓より、化粧箱とその内容物の組合せ関係として多数出土している。南墳より出土した長方形合子 (奩) の胎は耳杯と同じく苧麻とみられる植物繊維布であり、下地の下層に骨粉を混和した、中国漢

代以降の漆器にみられる高級漆器の典型例と合致する。Box23 には器種不明の破片が多数含まれるが、それらは化粧箱の中の他の構成物であった可能性がある。長方形合子 (奩) は化粧箱の組物として、一括して Box23 に取り上げられた可能性がある。

(d) 南墳より出土した布胎漆盌

南墳の Box8 より内赤、外黒で、底径が約 6cm の漆盌が出土した。この漆盌(わん)は土圧により潰れていたため口径は不明であるが、推定口径は 12cm 程度とみられる。漆盌の胎は苧麻とみられる植物繊維布で、前述の耳杯、長方形合子 (奩(れん)) と同様、下地には骨粉が用いられている。Box8 からはさらに、金銅製覆輪の破片も出土している。

この漆盌や金銅製覆輪から連想されるのは、中国陝西省西安市に所在する西安理工大学壁画墓の漢代の壁画に描かれた宴会の場面にある、客人の前に並べられた内赤・外黒漆器の飲食器群である (写真 33)[西安市文物保護考古所 2006]。さらに盌については中国山西省大原市より出土した「北斉徐顕秀墓」の壁画に描かれた墓主と墓主婦人が手にする内赤、外黒の漆盌である (写真 34)[太原市文物考古研究所編 2005]。徐顕秀は西暦 571 年に死去しており、皇南大塚よりも時代が下るとみられるが、南墳出土の盌と徐顕秀墓の壁画に描かれた墓主が手にする盌は酷似する。

Box8 の漆盌も本来そのような用途で用いられた可能性がある。本漆器は前述の漆器と同様に、東アジアにおける高級漆器の系譜に位置づけられる。

(e) 文様のある容器類

文様の描かれた漆器としては火焔文、動物文、鳥文、幾何学文がある。このうち火焔文の漆器のみ、南・北墳から出土しており、ほかはみな北墳より出土した。火焔文の漆器は胎が苧麻とみられる植物繊維布であり、下地に骨粉を混和しており、高級漆器とみなされる。それ以外に、器種は不明であるが、胎は木胎で、その上に骨粉を混和した塗膜も検出された。それらの漆器は布胎漆器に準じた高級漆器の範疇に入れることができる。

写真 33　西安理工大学壁画に描かれた飲食器

写真 34　徐顕秀墓壁画に描かれた漆盌

他方、動物文や鳥文の漆器はみな広葉樹・環孔材からなる木胎であり、下地はきわめて簡略であった。これらの漆器は木胎が消失している割に、原形が推定できる程度の面積で塗膜が遺存している。そのため、従来、これらの漆器が皇南大塚を代表する漆器のように取り扱われることがあった (12)。しかしながら、既述のごとく、漆工技法の観点からするならば、それらの漆器は皇南大塚より出土した漆器群の中で、簡略に製造された漆器の部類といえる。

(2) 南・北墳における漆器構成の差異

南墳ならびに北墳から出土した漆器の器種構成をみると、南墳から出土した漆器の中に小合子類が

認められるが、それらは本来、より大きな箱に組物として納められていた可能性がある。通常、組物は同一工房において、同一技法によって製造され、形状・文様・塗膜構造ともに、きわめて規格性が高い。そのため、それらが組物として副葬され、漆器の保存条件が悪く、細片化すると、本来の組合せ関係を復原することきわめて困難である。その結果、細片化した破片からは、本来の個体数以上に点数が多くみえている可能性がある。対して北墳より出土した漆器は木胎が多く、しかもそれらの塗膜が薄いために塗膜が重なり合っても嵩張らず、収納された漆器の点数が少ないようにみえる。

塗膜分析の結果を参考にすると、南・北墳にはどちらにも飲食器類、化粧箱が組物として副葬された可能性があり、それらの器種構成は両墳において大差なく、むしろ、その品質において差異が大きかったと思われる。その結果、皮肉なことであるが、南墳の漆器は器種がわからないほどに劣化が進行したのに対して、北墳より出土した漆器の多くは木胎であり、胎が消失しても塗膜は比較的大きな面で遺存したと思われる。そして、後者の表面には動物文や鳥文が描かれ、見栄えがするため、皇南大塚を代表する漆器のように取り扱われることになったと思われる。

4.2. 南・北墳より出土した漆器の由来

皇南大塚の南・北墳より出土した高級漆器と分類された夾苧胎漆器ならびに布胎漆器には以下の共通点がある。

① 胎、もしくは補強のために布を用いる
② 下地に骨粉を混和する
③ 黒漆層に油煙類を用いない

この３点の特徴は、中国漢代以降、宋代までの漆器に広く認められている [岡田 2005]。そこで、皇南大塚の南・北墳より出土した漆器の由来については２つのことが考えられるであろう。一つは、これらの漆器が組物として中国大陸より将来され、被葬者によって生前使用されたものが副葬されたとする考え方である。他のひとつは、中国において漢代頃までに発明された高級漆器の製作技術が、この時期までに朝鮮半島に技術移入されており、朝鮮半島において製造・使用され、そして副葬されたとする考え方である。そのいずれであったかについては、同墳より出土した他の遺物を含めて総合的に考察すべきであろう。

他方、南･北墳より出土した木胎漆器については、文様の描かれた漆器を含めて下地・漆塗装ともに簡略であった。しかも、下地に火山ガラスが用いられていた。火山ガラスの由来が木胎漆器の製作地を判断する根拠になる可能性がある。

Ⅴ．まとめ

皇南大塚南・北墳より出土した漆器の材質技法調査を通して、明らかになった点をまとめると以下のとおりである。

①南墳より出土した漆耳杯、漆盌（わん）、漆長方形合子などの布胎漆器の下地には骨粉が混和されていた。それらの漆器は、同時代の東アジアにおいて、中国の秦～漢代以降に発達した高級漆器の系譜に位置づけられる。
②南・北墳より出土した耳杯、盌、長方形合子などは飲食具、化粧箱などの一部であり、もともと組物として副葬された可能性がある。
③南墳と北墳では漆器の品質に差異があり、南墳には中国漆器の系譜につながる夾苧胎漆器、布胎漆器などの高級品が多く副葬されていた。北墳には南墳の漆器よりも製造が簡略な木胎漆器が多かった。
④北墳より出土した黒漆地に動物や鳥の文様を描いた容器類の多くは木胎で、漆器製作工程は比較的簡略であった。

謝辞：
皇南大塚出土の漆器を調査させていただくにあたり、慶州文化財研究所、李恩碩（イウンソク）氏、奈良大学大学院生の林志瑛（イムジョン）氏 (当時) にご便宜とご配慮をいただいた。記して謝意を表する次第である。

参考文献（刊行年順）：

原田淑人 1930『楽浪』刀江書院
朝鮮古蹟研究会編 1934『楽浪彩篋冢』(古蹟調査報告 1).
国立民俗博物館編 1989『韓国漆器二千年』(国立民俗博物館特別展 22)
岡田文男 1995「楽浪王旴墓出土の漆器」『古代出土漆器の研究』京都書院 :123-144.
国立慶州博物館編 1998『国立慶州博物館』通川文化社 .
中国漆器全集編集委員会編 1998『中国漆器全集』第 3

巻 漢 , 福建美術出版社 .
金庚洙・兪恵仙・李容喜 2003「楽浪漆器의 漆技法 調査 (I)」『박물관보존과학』4, 국립중앙박물관 :79-88. [「楽浪漆器の漆技法調査」『博物館保存科学』4, 韓国国立中央博物館]
岡田文男 2005「伝牽牛子塚古墳から出土した夾苧棺断片の塗膜構造について」『漆工史』28 号 , 漆工史学会 42-49.
岡田文男 2005「宋代の無紋漆器にみられる骨粉下地とその表現効果」『漆工史』28 号 , 漆工史学 : 21-33.
太原市文物考古研究所編 2005『北斉徐顕秀墓』文物出版社 .
西安市文物保護考古所 2006「西安理工大学西漢壁画墓発掘簡報」『文物』2006-5: 7-44.

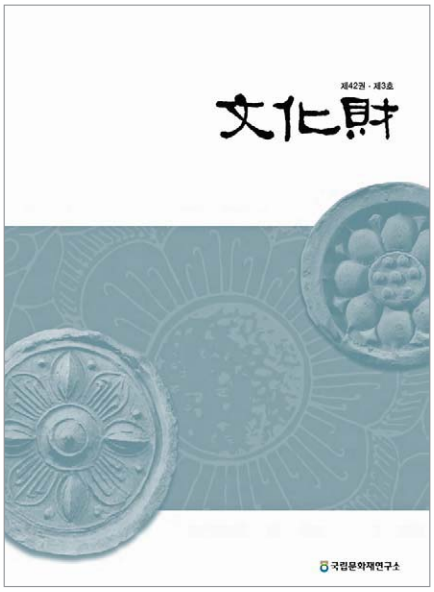
原載：

岡田文男・이은석・임지영 2009「경주 황남대총 출토 칠재품의 재질 및 기법조사」『文化財』第 42 巻 3 号 , 国立文化財研究所 : 176-191.

公開先（雑誌『文化財』42 巻 3 号）：

https://www.nrich.go.kr/kor/subscriptionDataUsrView.do?menuIdx=1106&idx=87&gubun=J

＊ダウンロードは雑誌全体の PDF



翻訳後記：

皇南大塚については、文化財管理局文化財研究所から南墳と北墳の各報告書が刊行されている。両報告書とも各墳で出土した漆器の報告があり、また北墳報告書ではそれに加えて漆器文様の考察論文が掲載されている。その分類は本稿に反映されており、漆器に関する部分のみ訳文を付記する。図については掲載しないので、原報告書で確認していただきたい (公開先は末尾付記)。

付 1：

『皇南大塚 南墳発掘調査報告書』

漆器

尹根一 윤근일

（文化財研究所学術研究官[1]）

2) 漆器

漆器は主槨上東南隅、収槨部木蓋下の南便、収蔵部内という複数箇所から出土したが、大部分は収蔵部内から最も多く出土した。

a) 漆器小盌 (図版 236-1, 2、挿図 43)

副葬品収蔵部内南便の青銅甑[2]内で重ねられたまま出土した。出土当時には良好な状態であったが、その当時の漆器の保存処理は未熟であったため、破損が深刻である。したがって略報の内容を引用することにする。

3 点は薄く削って網代文様に編んだ竹皮を心にし、内面は朱色、外面は黒色に漆塗りした半球形の盌で、低い高台の付いた平底であり、口縁下に 1 周の朱色線帯を巡らせたのが唯一の装飾である。[口径 10cm、高さ 5cm、底径 6cm]

他の 3 点 (挿図 45,52) は大型の盌内に入ったまま出土した。大きさは若干小さいが、形態は大型と小型が同一で、器表全面に朱色と黄色で施文されている。口縁には 2 周の平行線帯内に 2 周の点入波状文帯を描いており、底部の高台にも 1 周の朱線帯を配置し、器表面には上・中・下 3 列で火炎文式に表現した " 出 " 形と 6 ～ 8 個ずつの方点がある珠文を挿入して連続的に描いている。3 点中 1 点に

1 所属と職位は報告書刊行当時。
2 報告書 p.116 青銅甑 (図版 230-1・2, 図面 7-- ②) に該当。